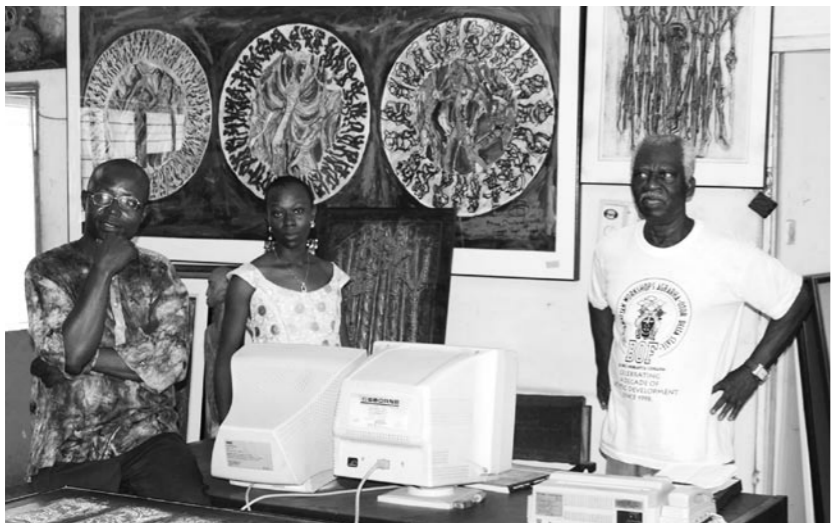


アフリカ大陸の西端セネガルから、海沿いに東へコートジボワール、ガーナ、さらにナイジェリアに至るまで、ギニア湾に面する沿岸および内陸の国々には、ほぼ一月から三月の初めにかけての乾季になると毎年、はるかサハラ砂漠から季節風が吹いてくる。

ハルマッタンとよばれるこの風は、砂漠からやってくるから熱風だと勘違いされやすい。だが、じつは乾いた北風であり、この季節になると朝晩などはセーターなしではいられなくなる。ときおり朝早く、背の高い木々のこずえを真っ白い朝霧が包みこんでいるさまを目にすることがあるが、一瞬雪が降り積もっているのだと錯覚してしまう。それほど肌寒いのだ。

しかも砂漠の微細な砂塵を運んでくるため、少し街なかを歩いただけで、唇は割れ、喉は乾き、髪の毛はばさばさになる。ただし、熱帯の強

がて、リノリウムを使ったレリーフ（浮き彫り）や、自分を育んでくれたウロボ文化の伝統宗教の祭壇に取材したインスタレーションを発表するなど独自の境地を切り拓く。



オノブラックベヤ(右端)とその家族

ハルマッタンの吹くころ ナイジェリアの 老アーティストの挑戦

アフリカ最大の人口を擁するナイジェリア。乾季になると、北方のサハラ砂漠からハルマッタンとよばれる北風が吹く。その名を冠したワークショップをひきいるのは、ブラック・アフリカを代表するアーティスト、オノブラックベヤ。一九六〇年のナイジェリア独立直後から活躍する老アーティストの意気は北風にもひるむことはない



かわぐち ゆきや
川口幸也
民博文化資源研究センター
専門はアフリカ同時代美術、展示象論、美術を通して、アフリカの内外でアフリカがどのように語られているのかをテーマとしている。

烈な太陽の光を和らげてくれるから、昼間はいくぶんしのぎやすいという利点もある。

「ザリアの反逆児」の一員として

この西アフリカの乾季の風物詩ハルマッタンの名を冠したアートのワークショップが、一九九八年以来毎年、二月から三月にかけて実施されている。場所はナイジェリア南東

前を運ねたのである。今日では、彼の作品は欧米をはじめ、世界じゅうの主だった美術館や博物館で見ることができ。わが民博もそのひとつである。

ワークショップ自体がお祭り

さて、ハルマッタン・ワークショップだが、このワークショップは絵画、彫刻はもとより、染織、版画、陶芸、鍍金、宝飾にいたるまで、幅広い分野にわたっている。参加者は各コースに分かれ、コースごとに内外から招いた講師の話や聞き、また仲間うちで議論を重ね、実際に作品をつくり、それらを展示する。もちろんいくつものコースを梯子することもある。

こうしてひととき、若手が先輩のアーティストから学び、また若者がたがいに交流し、刺激しあう場が立ち現れるのである。

ハルマッタンの時期はまた、ヤシの実の収穫の季節であり、とくにデルタ地帯では魚にちなんだ多彩なお祭りがおこなわれる季節でもある。各地からやってき

部、ニジェール川河口のデルタ地帯に位置する小さな町アバラ＝オトール。対象は主に国内の若手のアーティストたちである。主宰しているのは、ナイジェリアを代表するアーティストとして国民的な人気を誇る

た参加者にとつては、このデルタ地帯の風物を見聞するまたとない好機なのだ。そのうえ、いまではこのワークショップ自体が、アートをテーマにしたひとつのお祭りになっているという面もある。

老アーティストの パワーの源

それにしても、いわば功なり名を遂げた老大家といつてよいオノブラックベヤが、八〇歳近くにもなつて、なぜ若手のためのワークショップにこれほどこだわり続けるのだろうか。なにしろ日本と違って、平均寿命の短いアフリカでは七〇や八〇といえたいへんな年寄りなのである。

その謎を解く鍵は、たぶん彼の若い時分の体験にある。

一九六〇年代の初期、つまりナイジェリアの独立直後である。西部の大都市イバタンでは、当地に住むオーストリア生まれのドイツ人ウリ・バイアーが、地元で若いアーティスト相手にワークショップを定期的に開いていた。

は、分野を問わず最優先の課題であった。

オノブラックベヤもそうした若者のひとりであり、そんな彼の熱い心をワークショップの講師たちの話はおおいに鼓吹したに違いない。このときの胸躍る鮮やかな記憶が、いまなお彼を駆り立てているのではないかと、わたしは思っている。

北風に立ち向かって

かつて北のヨーロッパの植民地主義に壟断されたアフリカ諸国の歴史を踏まえて、「自分で唇を舐めない」と、また北の方からハルマッタンが吹いてきて唇がひび割れてしまう……という意味のことをいったのは、たしかナイジェリアの作家チヌア・アチエベである。

独立して以来、手さぐりで国造りに邁進してきた自分たちの経験を、あとに続く若者たちに語り継がないと、二一世紀のナイジェリア文化はまた北からやってくるハルマッタンに飲み込まれ、分断されてしまう——このワークショップには、オノブラックベヤのそうした憂いも込められているのではないだろうか。

ハルマッタン・ワークショップというものは、いろいろなることをわたしたちに考えさせてくれる、なかなか味わい深いタイトルである。